

文学分野

極東地域における文化交流

メンバー

- 川合康三（京都大学大学院文学研究科教授・リーダー）
日野龍夫（京都大学大学院文学研究科名誉教授）
木田章義（京都大学大学院文学研究科教授）
大谷雅夫（京都大学大学院文学研究科教授）
大槻 信（京都大学大学院文学研究科助教授）
平田昌司（京都大学大学院文学研究科教授）
木津祐子（京都大学大学院文学研究科助教授）
田窪行則（京都大学大学院文学研究科教授）
伊藤伸江（愛知県立大学教授）
沈 慶昊（高麗大学教授・京都大学招聘外国人学者）
緑川英樹（関西学院大学非常勤講師）
長谷川千尋（日本学術振興会特別研究員）
橋本正俊（京都大学非常勤講師）
堂園淑子（京都大学大学院文学研究科研修員）
好川 聡（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）
小山順子（京都大学大学院文学研究科研修員）
中島貴奈（京都大学大学院文学研究科COE研究員・研究会補佐員）

研究会の趣旨

21世紀の世界は、科学技術のさらなる開発と発展によって、これまでを上回る速度でいっそうグローバル化していくことでしょう。しかし、交通・通信が今日のように発達していなかった時代においても、人々は異なる文化圏の間で驚くほど自在に、そして柔軟に往来してきたのでした。当時の手段が制限されていたことを思えば、その交流の活発さには感嘆するほかありません。文化は古くから常に外へ拡がろうとするもの

であり、そこに生じた接触によって個々の文化が展開してきたのでした。そうした過去の文化交流のありさまを探求することは、今日そして今後のグローバル化がいかにあるべきかを考えるうえでも、貴重な指針になるにちがいありません。

私たちは地域を極東に絞り、その地でかつて行われてきた文化の交わりを様々な相から考えてみたいと思います。中国の文化・学術を周囲の日本や韓国などはどのように受容したのか、中国の文学は日本の文学にどのように取り込まれたのか、或いはまた日本における西欧近代の摂取はどのように中国に伝わったのかなど、参加者それぞれの関心をもとにした多様な交流のありさまが対象となります。研究会の活動を通して個々の研究を推進するとともに、分野・領域の異なる研究の最新の成果に触れることによって、新たな視点を獲得し、従来の枠組みを越えた展開を目指します。

研究会はさらに二つの研究班に分けて推進していきます。「乾の会」は文学研究科の教官を中心メンバーとし、参加者の研究発表、国内外の研究者を招聘したスピーチを内容とします。

一方、「坤の会」では大谷・川合を中心に国文・中文のOD・DCを加えます。具体的には「漢和聯句」の会読を進めます。これは中国の聯句と日本の連歌とが合体した文学様式ですが、中国と日本の文学の関わりを見るうえで好個の材料であり、詳細な訳注の刊行を目指します。「坤の会」は若手研究者の育成というもう一つの成果も意図するものです。

活動状況

2002年度

2002/11/22 第一回 「坤の会」 川合康三「中国の聯句」
長谷川千尋「日本の連歌と連句」

2002/12/12 第一回 「乾の会」 日野龍夫教授
「新体詩の一元流 漢詩和訳のもたらしたもの」

- 2002/12/28 第二回 「坤の会」
「永正七年正月二日実隆公條両吟和漢百韻」輪読
1回目
担当：長谷川千尋、堂園淑子
- 2003/01/28 第三回 「坤の会」
「永正七年正月二日実隆公條両吟和漢百韻」輪読
2回目
担当：長谷川千尋、堂園淑子
- 2003/01/31 「ニューズレター」第1号 発行
- 2003/02/19 第二回 「乾の会」 陳尚君 先生（復旦大学中文系教授）
「唐代の亡妻と亡妾の墓誌」
- 2003/02/25 第四回 「坤の会」
「永正七年正月二日実隆公條両吟和漢百韻」輪読
3回目
担当：長谷川千尋、堂園淑子
- 2003/02/28 「ニューズレター」第2号 発行
- 2003/03/03 第三回 「乾の会」 李鍾振先生（梨花女子大学教授）
「比較文学の観点からみた韓国・日本・中国の近代文学の特徴」
李炳漢先生（ソウル大学名誉教授）
「詩人花を賞す 其の一 梅」
- 2003/03/25 第五回 「坤の会」
「永正七年正月二日実隆公條両吟和漢百韻」輪読
4回目
担当：橋本正俊、好川聡

2003年度

2003/04/20 「ニューズレター」第3号 発行

2003/04/28 第六回 「坤の会」
「永正七年正月二日実隆公條両吟和漢百韻」輪読
5回目
担当：橋本正俊、好川聡

2003/05/21 第四回 「乾の会」 柴谷方良教授(ライス大学言語学科)
「言語の形式と機能：東アジア言語と他との比較
から」

2003/05/26 第七回 「坤の会」
「永正七年正月二日実隆公條両吟和漢百韻」輪読
6回目
担当：橋本正俊、好川聡

2003/05/30 「ニューズレター」第4号 発行

2003/06/30 第八回 「坤の会」
「永正七年正月二日実隆公條両吟和漢百韻」輪読
6回目
担当：橋本正俊、好川聡

「乾の会」研究発表・講演要旨

第一回

「新体詩の一元流 漢詩和訳のもたらしたもの」 日野龍夫

唐の張若虚の「春江花月夜」は、七言三十六句の長詩で、春の夜の花月の艶麗な風情に誘われて、この夜をどこか遠くの空の下で過ごしてい

るであろう漂泊の旅人と、帰りを待つ空閨の妻に想像を馳せるという、甘美な情緒に満ちている。松浦静山の随筆『甲子夜話』に、会津藩士某がこの詩を和歌の長歌風に和訳した作品が収められている。

日本近世には、日本語による韻文としては和歌の短歌と俳諧の発句という、極端に短い形式しか存在しなかった。賀茂真淵が万葉調を提唱して以来、一部の歌人たちに長歌復興の機運がやや見られたが、作られた作品は同じ歌人たちの短歌に質・量ともにはるかに及ばない。

近代に入って、明治十五年（1882）刊の『新体詩抄』を嚆矢として、日本語による長詩 新体詩 を作ろうとする動きが盛んになった。この動きが、『新体詩抄』所収十九編のうち十四編が英仏の詩の翻訳であることが示すように、欧米の長詩から大きな影響を受けていることは間違いなく、そのことは従来から指摘されている。

その一方、日本には明治以前から、和歌の長歌以外にも、七音句と五音句を組み合わせた端唄・俗曲などの長詩形式が存在する。新体詩の源流を、欧米の長詩だけでなく、これらの伝統的長詩形式にも求めなければならないという意見は、近代文学研究の世界でも出てきているようである。

「春江花月夜」の和訳の存在を手がかりにして、その近代以前から存在した長詩の中に、漢詩の長詩の和訳を一つのジャンルとして考えるべきことを提唱したい。「春江花月夜」の和訳は、破格を二箇所含みはするが、一応和歌の長歌の形式で作られている。伝統的長詩形式という場合、長歌は当然すでに含まれているから、漢詩の長詩の和訳というジャンルをことさらに立てる必要はない、かに思われる。

しかし、日本固有の長歌は、何か公的な重々しい素材を、それにふさわしい荘重な口調で詠するのが普通であって、「春江花月夜」の和訳詩に見るような甘美な情緒を詠ずることは、原則としてない。形式は長歌であっても、詩情において日本固有の長歌と異質の、漢詩の長詩の和訳だからこそあり得た日本語の長詩ということが出来る。漢詩の和訳が一つのジャンルを形成する可能性はある。

漢詩の和訳の例は、『六朝詩選俗訓』『連珠詩格訳注』の二点の訳詩集を始め、諸種の随筆などに作品が散見して、量的には一ジャンルを成すだけのものがある。そのほとんどは絶句の恋愛詩であるが、似通った素材の日本固有の形式の恋愛詩と比較して、いかにも中国詩らしい特徴を

備えており、質的にも日本固有の恋愛詩とは別ジャンルというに足りる。ただ、見出される例はすべて短詩の翻訳であり、長詩の翻訳は前記「春江花月夜」以外の作例がまだ管見に入らない。明治期の新体詩の一流流として漢詩の和訳というジャンルを想定するからには、長詩の和訳の例を他に見出さないことには説得力がない。

私は、蕪村の俳詩「北寿老仙をいたむ」を漢詩の長詩の和訳に代わる作例として取り上げたい。島崎藤村の『若菜集』の中に紛れ込ませても通りそうな、近代的詩情に満ちたこの文語体自由律詩は、潁原退蔵氏の論文「春風馬堤曲の源流」が、博搜の調査によって発見した、時期的に先行する俳諧師の長詩数編を挙げて、蕪村はそれらの作品から影響を受けて作ったと論じている。

しかし、先行作として潁原氏の挙げた数編と、蕪村の作とでは、詩情の質に差がありすぎる。私は、蕪村の作は、漢詩の悼亡詩、中でも、山に登って人生短促の悲哀を詠ずるといふ、古来から作例のあるパターンを学び、日本語を用いて漢詩のその趣向を詠じたものと考え。和訳ではなくて、すでに独立した長詩になっており、かつ日本固有の哀傷詩には見出せない詩情を湛える蕪村の詩は、漢詩の長詩の和訳以上に、私の主張にとって有益な論拠となる。

『新体詩抄』の翌明治十六年刊の『新体詩歌』第四編には、唐の劉廷之の長詩「代悲白頭翁吟」の和訳が収められている。『新体詩抄』の翌年に世に出たが、それ以前に作られていた作品が、新体詩が続々登場するという世の気運に乗って、日の目を見たものと解される。漢詩の長詩の和訳は、伝統的長詩形式の中で一ジャンルを形成しうるほどに、作られていたと思うのである。

第二回

「唐代の亡妻と亡妾の墓誌」 陳尚君（復旦大学教授）

唐代の文人達によって書かれた墓誌は現在でも数多く見ることができ、自分自身の妻や妾の為に書いた墓誌となると、その数は極めて少ない。現存する文集の中では、柳宗元が妻にむけた一篇と、元稹と沈亞之が妾にむけた二篇が見られるのみである。しかし近年発掘調査が進み、新たな資料が次々と発見されることによって、今では亡妻の墓誌が

約八十篇、亡妾の墓誌が約二十篇見られるようになった。今回の発表は、これらの新たに発見された墓誌を分析することで、唐代の家庭生活の実態や実情などを明らかにしていきたい。

墓誌というのは、基本的には著名な文人に代筆を頼むものであるが、それを自ら執筆するのは我が妻に対して特別な思い入れがあるからである。亡妻墓誌中に見える妻達はその大部分が二、三十代で夭折しており、また貧苦や艱難を共にしたという記載がよく見られる。こうした境遇が自ら妻の墓誌を書くという行為を生み出すのであろう。ただ、その叙述の大部分は妻の先祖や一族の紹介に費やされ、妻に関する記述はごく僅かにすぎない。例えば盧輶が妻鄭氏を弔った墓誌は全文が二千字であるが、その内五分の二が妻の先祖達についての記述に割かれ、さらに続けて妻の兄鄭顥の経歴が五百字にも及んでいる。それに対して、妻に関する記述はわずかに百字にも満たないのである。これは墓誌の中では妻自身より、その一族の功德や栄誉がより重視されていることを物語っている。

また、妻に関する記述の内容も型が決まっていて、その徳や才能を顕彰することが基本である。様々な書物に精通しているその博学ぶり、あるいは「嫉妬しない美德」などが誉め讃えられるのだ。一方、その容貌が記されることは稀で、また夫婦間の関係についても「巫山雲を彩る」等の典故を用いた抽象的な表現が普通であり、具体的にその親密な様子を記したものはほとんどないのである。

これが亡妻墓誌になると、内容が大きく異ってくる。妾となる者は家柄が低く妻には決してなれない身分であり、そうした者に対して自ら墓誌を書くのは珍しいことである。その墓誌の中では、「粉黛も其の美を増すに足らず」、その美しさを強調するものが見られ、またその才能も、学問についてではなく歌舞について書かれたものが最も多い。こうした亡妻と亡妾の墓誌における内容の差異の中に、唐代の士人の妻と妾に対する接し方の違いが垣間見られる。

次に、唐思礼の墓誌を取り上げて当時の家庭環境を分析してみたい。唐思礼は彼自身の墓誌が残されている他、前妻の王氏の墓誌と後妻の俞氏の墓誌をそれぞれ自ら書いており、これらの墓誌から三つのことが読み取れる。

一つは、夫との年齢差が二人とも二十歳ほど離れていることである。

これは当時においては珍しいことではない。次に、妻と妾と妓女の他に「女奴」という奴隷を家に買うことがあり、これが寵愛を受けることもあったということ。そして、王氏も俞氏も子供に恵まれず、他には二人の息子がいたが、庶子であるために二人は家を嗣ぐことが出来なかったことが分かる。ただ、嫡子がいなければ庶子でも家を嗣げるのが普通であり、この唐思礼の場合は特殊な例といえる。

先に述べたように、妻が妾に嫉妬しないことが妻たるものの重要な徳目の一つに数えられているが、妾を娶るのにも様々な状況がある。まず、結婚前から妾を蓄えている例。それに、結婚後に妾を納める例。妻が夫のために妾を捜してくるということもある。また、妻が亡くなった後に妾を娶ることもある。柳宗元がそうであり、亡妻楊氏の服喪期間中に妾との間に子供が産まれている。さらに、柳知微のように、陳蘭英という妾を娶るだけで終生妻を娶らなかった例もあるのである。

最後に亡き夫の為に書いた墓誌と亡き妓女の為に書いた墓誌を見てみたい。妻が夫の墓誌を書くことは極めて稀であり、現在ではわずかに三篇しか見ることができない。しかし、そのどれもが哀切な表現に富んでおり、また妻鄭氏によって書かれた李府君の墓誌に「公の身長六尺四寸、素き膚に青き髭」という身体の特徴や、「公の性は朋友を好み、門に食客多く、家には餘産無く、盡く以て人に濟う」という懐の広い性格が描かれているように、夫が妻の為に書いた墓誌には見られないような、具体性に富む描写がなされている。また、源匡秀が妓女である沈子柔の為に書いた墓誌は、彼の沈氏に対する熱い思いにあふれており、例えば「火は我が愛を燃やすも愛は銷けず、刀は我が情を斷つも情は已まず」という墓誌には有り得ないようなストレートな愛情表現が見られ、興味深い。(好川聡記)

第三回

「詩人花を賞す 其の一 梅」 李炳漢(ソウル大学名誉教授)

中国の士大夫文人達は早くから天上の日月星辰、または地上の山、海、河等を畏敬の対象として認識し、そこから宇宙自然の厳正な運行法則を発見してこれを生活の規範に引き入れてきた。彼らの観察対象は天体や山、海、河に留まらず生活周辺のあらゆる自然物の生命体にまで拡大し

た。その中でも特に松柏と梅、蘭、菊、竹等は、いわゆる「君子比徳」の実体として設定され、それらに近づき、またそれらから学ぼうとした。そして詩人墨客達はそれらを作品の素材として扱ったのである。このような審美意識の傾向は漢字文化圏であった韓国、日本の知識人の間でも自然に広がったのであろう。今でも韓国の知識人の中では梅・蘭・菊・竹を「四君子」と称して、これらを栽培し、または詠じたり絵に描いたりすることで、間接的な交わりを通じて自己の人格の向上を図る人が少なくない。

梅・蘭・菊・竹を「四君子」と称するのは序列按排ではなく生態と関連した春夏秋冬の季節区分である。春は冬が過ぎると訪れる季節であるが、詩人はこの季節の変化をただの循環現象と見るのではなく、造物主の舞台設計として描写することもある。梅花は雪の中でも花を開くことから「雪中梅」と呼ばれ、また四君子の中でも最も早く咲くことで「第一君子」と称されたりもする。清の詩人張維屏の「新雷」は、「春の伝令」としての梅花の姿を歌った詩である。また士大夫達は雪の中で寒さを忍んで咲く梅花を通して君子の堂々たる気性を学び、春になってあちこちに咲くいろいろな花とは混在せず、何よりも先に咲く梅花を君子の孤高な徳性と見なしたりした。元の詩人王冕「白梅」の「氷雪林中此の身を著し、桃李と同じく芳塵に混ぜず」の句はそれを歌っている。唐の詩人張謂は「早梅」で、川の橋あたりに満開の梅花を見てそれがまだ溶けていない冬の雪のようであると描写し、また宋の王安石は「詠梅」で「遥かに知る是れ雪ならざるを、暗香の来る有るが為なり」と、梅花から漂い来る芳しい香りのため、遠くからも雪ではないことが分かったと詠んでいる。前者は梅花の色を、後者は梅花の香りをととも効果的に形象化したものである。宋の廬梅坡は「雪梅」で、梅花と雪と詩の三つを有機的に配合して高次元の春の情趣を描写した。陸游は「梅」で、梅花と友達になりたいが、世俗に汚れた自分を梅花は認めてくれないかと憂い、「今より火食を断ち、水を飲んで仙書を読まん」と誓いを詠じている。唐の王維は「雑詩」で、他郷で久しぶりに故郷から来た人に会い、何よりもまず自分の家にある梅花が咲いているかどうかを尋ねた。故郷のことなら家族の安否など聞きたいことは沢山あっただろうが、梅花の消息を先に聞いたところに詩人の詩趣が感じられる。宋の杜耒は「寒夜」で、梅花をもっと身近な日常生活にまで引き寄せて歌った。明月の冬夜、

火鉢を囲んでお酒の代わりにお茶を飲みながら談笑する士大夫の姿を一
幅の画のように描きつつ、開花した梅花があることで普段と違っている
と描写することによって梅花の清雅な気品を効果的に詠じたのである。

梅花は蘭・菊・竹と共に文人画の題材として好まれる。明末清初の詩
人張風は「踏雪尋梅図軸」で、雪を踏んで雪中の咲く梅花を探しに出か
けたが、探し出すのは容易ではなかった。詩人はそこで梅花を描いた絵
を見、梅花の色・香り・美を代わりに満足させる形で梅花を鑑賞するの
である。清の詩人李方膺の「題画梅」は、自ら描いた梅花に付した題画
詩である。ここでは、絵の中の梅花を天風の力を借りて遠いところまで
吹き飛ばし、世の人々に等しく春の喜びを与えようとする詩人の心配り
が表れている。清の詩人金農「画梅」の、よく整理された庭園の梅花よ
りは野生の梅花を好むという表現からは、画家金農の浩たる性格が窺
える。同じく金農の、自分で描いた梅花に思いを入れるあまり、その絵
が他の人の手に渡されるのを惜しんで、梅花にどこに住みたいかと尋ね
る言い方には、画家の梅花に対する限りない愛情が窺える。

山や野原の梅花を探しに出かけ、これを詩に詠じ、また絵に描いたり
するのは、我々の審美欲求を充足させ、人生を豊かにするよい方法であ
ろう。またその旨を同じくする人々と共に梅花を詠じた詩や梅花を描い
た絵に対して談笑することは、現代人においても楽しいことであろう。

(鄭 増謨記)

「比較文学の観点から見た韓国・日本・中国近代文学の特徴」

李鍾振(梨花女子大学教授)

近代文学の概念は研究者の見方によって様々であるが、本発表では近
代という時間的背景のみによって規定される文学ではなく、近代的な精
神と形式を備えた質的に新しい文学、すなわち”市民精神を内容とし、
自由な散文を形式とする文学”であるという面から探りたい。

西洋の市民社会とは異なり、東アジアの近代国家体制の整備および市
民社会の形成は外部からの強制的な門戸開放が決定的な契機となった。
よって三国それぞれが近代を説明する際、影響史の側面を強調する立場
と、自生的側面を強調する立場が相矛盾し、それぞれのアイデンティテ
ィーを確立できないまま、自国中心の立場で文学史を記述しているのが

現状である。最近これを克服しようとする動きがあるが、未だ新しい文学史として実現するには至っていない。よって本発表では、その前段階として東アジアの近代文学展開過程に見られる差異と共通点を明らかにし、その個別性をもとに三国の近代文学の普遍性を把握したい。

東アジアの近代文学は、はじめから西欧的な近代の概念、平等思想・科学思想・民族思想を土台として起こっており、こうした思想の実践行為と近代文学展開の過程とは軌を一にしている。

実践行為とは思想を伝播するための教育機関の設立、雑誌の創刊等であり、これは文学の創作・出版など、民族主義高揚のための文学的実践行為へと繋がってゆく。この点に考慮すると、近代文学は政治の変革における大きな契機であり、社会変化をもたらすための道具であったともいえる。よって近代文学の起点とその展開の様相について論じるには、政治変革との相互作用を考慮する必要がある。

東アジア近代文学の“近代性”についての議論は様々な側面から進めることが可能であるが、ここではまず文芸思潮の展開・作家と読者の様相・メディアと言語の問題といった、西欧文学との影響関係を究明することのできる三つの面から、政治史的背景をふまえて考察する。

文芸思潮の展開をみると、日本は主に留学によって、韓国・中国は主に日本語の翻訳物によってというように受容の経路は異なるものの、展開過程においては類似の様相を呈する。まず、西欧では約200年かけて自然発生的、漸進的に展開された文芸思潮を、わずか2、30年の間に受容したことによる混乱が指摘できる。さらに詳しく混乱の理由を探ると、一つには文芸思潮の出没が正常の歴史的交替運動にのっとったものではなく、西欧の文芸潮流を無秩序に模倣したものであったことがあげられる。例えば西欧ではロマン主義に対する反発として現れた写実主義・自然主義が、韓国においては啓蒙主義を批判する純文学運動として始められたり、日本においては写実主義がロマン主義に先行したことなどがそれである。二つ目の理由としては、翻訳の問題や定義の誤解などによる、文芸思潮の概念に対する錯誤があげられる。さらに三つ目の理由は、西欧の文芸思潮に、無自覚かつ盲目的に追従したことである。これは、プロレタリア文学においてより顕著である。このように、西欧との時間的懸隔により歴史的交替運動であるはずの文芸思潮の流れを混在・併存させ、空間的懸隔により文芸思潮の概念の混乱・錯誤をもたらしたこと

は、東アジアの特殊な近代化過程の反映といえよう。

次に近代文学の展開を担った作家と読者の問題、さらにそれに関わる言語とメディアの問題にうつる。まずこの期の作家と読者の性格が前近代と区別される大きな理由は教育の大衆化によるものである。日本の帝国大学、韓国の元山学堂、中国の京師大学堂をはじめ、宣教師らによる多くの私立学校・専門学校等が設立された。そしてこれらの新教育において白話文や国漢文混用の教科書が用いられることにより、口語体の普及がうながされ、新しい作家や読者層の基盤が提供されたのである。このように、言語と文字の問題は文学大衆化の鍵である。中国では五・四運動を契機に白話文を中心とする言語体系が形成され、韓国では甲午改革と前後して国文の復興・言文一致の文体の導入などが行われ、新文学形成に大きな影響を与えた。

さらに作家と読者の問題は、都市の発達およびメディアの普及と密接に関わる。出版や流通の近代化により、作家と読者の関係はより匿名化した。そして書籍出版業の出現は文学の商品としての性格を強めた。

作家について論じるには、三国とも留学生の役割を看過することはできない。文学の近代化、雑誌・新聞の出版等は多く留学生たちによってなされた。作家意識については、東アジアの知識人にとって20世紀とは、士大夫の伝統から近代知識人へと変遷する時期であったといえよう。開化期の作家らは、少なくとも韓国と中国についていうならば、“文学(あるいは小説)という特定分野の専門家であったというより、社会のあらゆる局面を動かす重要な思想であれば何にでも関心を持つ、広範囲にわたる知識層人士”(権寧珉からの引用)であった。

近代文学が質量ともに本格的な成熟を見せるのは、だいたい1930年代に入ってからである。留学第一世代の影響を受けて成長した知識人は、西欧の教育制度のもと本格的に西欧の思想を習得した。一方で、多くが海外留学派であり現代都市文化を身につけて帰国した彼らは、文学活動においては都市型の文化を伝播し、共有する階層でもあった。特に30年代後半に至っては政治活動が困難になったことから商業的ジャーナルがメディアの中心となり、思想的に危険性がなくかつ名望のある作家を求めた。そしてそれが外国文学に対する眼目を備えた海外派らに合致したため、彼らが中心の座を占めるに至った。中国の新月派、日本の白樺派、韓国の九人会や詩文学派がその例である。

以上、東アジアの近代化の過程について文芸思潮・作家と読者・言語とメディアの三点を中心に、その背景となる各国の社会層と絡めつつ考察した。東アジアの近代文学の展開過程は、三国とも当代の社会状況と密接な関係を持つ。だが民族主義を基盤にした民主化という傾向は共通のものであった。文学が必然的に社会状況の影響を受けるか否かの議論はあるが、東アジアにおける近代文学展開の様相は、西欧の圧力とそれへの応戦の方法と関連するものであり、反外勢主義の一つの方法としての西欧化であったといえよう。

三国の中でも最も早く西欧化の道に進んだ日本の及ぼした影響は看過できないが、自国文学や民族文学を超えた幅広い視点から三国の文学史を包括する新しい東アジア文学史が記述されてこそ、各国の文学のアイデンティティーを確立することができるだろう。（中島貴奈記）

第四回

「言語の形式と機能 - 東アジア言語と他との比較から」

柴谷方良（ライス大学言語学科教授）

本発表では以下の3つの疑問に対する答えを与えることを目的とする。

- (1) 人間言語の機能と形式はどのような相関を持つか。
- (2) その相関は人間の認知をどのように反映しているか。
- (3) 言語の使用は機能と形式の相関にどのような影響を与えるか。

言語には同じ意味領域で一見同一の機能を果たすと見える言語形式が複数存在する場合がある。使役、再帰や、中動相における迂言形（独立した形式を用いる形）と形態論的表示（接辞、屈折などを用いた形）、語彙的形式などがその例である。以下のバリ語の例を見られたい。

Bali語の中動相

語彙的	形態的	迂言的
中動相	中動相	中動相
nyongkok 'squat'	xxx	(使役+ awak)
negak 'sit'	xxx	(使役+ awak)
xxx	xxx	nyagur awak- 'hit oneself'

xxx	ma-cukur ‘shave’	nyukur awak- ‘shave oneself’
xxx	ma-jalan ‘walk’	xxx

これに対する説明として、Haiman(1985)などは、その形式の使用頻度に基づく熟知度と相関を考えている。彼は、より使用頻度が高く、慣れ親しんだ状況に対しては、より縮約され、単純な形が使われ、その反対に使用頻度が低く、特殊な状況では、より長い、迂言的な形が使われるとする。すなわち、形式の長さで熟知度が相関するとするのである。

Haimanは、再帰形の短形と長形の使い分けに対し、内向き行為と外向き行為という区別を立て、内向き行為に短形を外向き行為に長形を使うと説明する。内向き行為とは通常自分に対して行う行為であり、「ひげをそる」とか、「髪を切る」、「体を洗う」といったものである。外向き行為は、通常他者に対して行う行為であり、「殴る」とか「押す」とかの行為がこれにあたる。内向き行為は、自分に対して行うのが無標であり、外向き行為は自分に対して行うのは有標になる。自分に対して行うのが無標である内向き行為により短かい形式を使い、自分に対して行うのが有標で、通常でない行為に対しては長形の再帰形を使うという説明である。以下のように、英語：[語彙的な形式] < [再帰形]、ロシア語：[接辞などの形態論的表示形式] < [迂言的な形式]となる。

English a. Max kicked himself. (迂言的な中動相)

b. Max washed. (語彙的な中動相)

Russian a. On porezal sebja. (迂言的な中動相)

he cut self

‘He cut himself.’

b. Ona odevaet-sja. (形態的な中動相)

she dress-MID

‘She is getting dressed.’

これは語の複雑さと使用頻度が負の相関を有するとしてZipf(1935)の考えに基づくものである。

しかし、「縮約形：非縮約形」、「複雑な形：単純な形」、「有標の形：無標の形」といった純形式的な指標による区別では、実際の言語現象を十全にとらえることはできない。たとえば、内向き行為、外向き行為による区別は二項対立的なものではなく、再帰形(ここで言う迂言的な中動

相)と形態論的な中動相との区別もはっきりしたものではない。

さまざまな言語で、再帰形、中動相における短形と長形の使い分けは連続的なものである。さらに、以下のようにスウェーデン語などでは「自分を見る」の再帰形が長形(=複合形)で「自分を鏡で見る」の再帰形が短形でも現れることから、動詞自体よりも状況の性質が問題になる。

Swedish (Tohno 1999; pc) : *sig själv, sig, ø, (-s)*

a. Hon såg *sig/ sig själv. (*sig, själv*ともに義務的)

she saw MID MID self

‘ She saw herself. ’

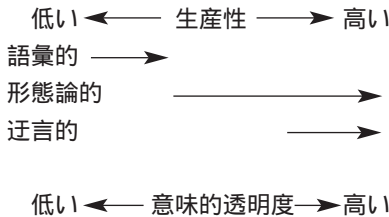
b. Hon såg sig (själv) i spegeln. (*sig* 義務的; *själv* 随意的)

she saw MID self in mirror. DEF

‘ She saw herself in the mirror. ’

また、「首をつって死ぬ」が言語によって、短形で現れた長形で現れたりすることから、ある行為がどのように捉えられるかは文化によって異なるといえる。

そこで、本発表では、形式と機能の関係を捉えるのに、形式の生産性という指標を導入する。すなわち、より生産性が高い形式は意味的により透明であり、より生産性の低い形式は意味的な透明度が低い。一般に語彙化した形式はもっとも生産性が低く、形態的な手段による形式はそれほど生産性が高くないものからかなり高いものまであり、迂言的な形式は生産性が高い。



この生産性の高さ、意味的な透明性は、熟知度の程度と相関する。



以上から、機能と形式の相関について次の原則を立てることが可能である。

機能的透明性の原理

より熟知度が低い、あるいは、普通でない状況は意味的・機能的により明示的なコード化を必要とする。

この原理の系としてつぎのことが導かれる：

- ・生産的な形態表示は、不規則的な形態表示、あるいは形態表示がないものよりも意味的により透明である。
- ・独立形式による迂言的な表現は接辞や屈折による形態的な表示よりも意味的により明示的である。

最初に提示した問いに対しては次のように答えられる。

(1) 人間言語の機能と形式はどのような相関を持つか。

人間言語の機能と形式の関係は恣意的ではなく、機能的透明性の原理に従う。

(2) その相関は人間の認知をどのように反映しているか。

熟知度があり予想できる事態と熟知度がなく予想できない事態とが区別される。

(3) 言語の使用は機能と形式の相関にどのような影響を与えるか。

使用頻度が高くなれば、より短い形式となり、透明性がより低くなる。

参考文献

Haiman, J. 1983. Iconic and economic motivation. *Language* 59:781- 819.

Tohno, T. 1999. Middle voice in Swedish. Kobe University MA Thesis.

Zipf, G. 1935. *The Psycho-Biology of Language*. Boston: Houghton Mifflin.

(報告 田窪)

「坤の会」輪読中の和漢聯句について

* 和漢聯句とは

和句(五七五または七七)と漢句(五言)を交えて連ねる連句文芸の一樣式。聯句連歌とも称する。中国に起源を持つ聯句と、日本の連歌とを折衷させて十三世紀の頃に生まれ、室町時代から江戸時代初期にかけ、主として堂上や禅林で盛行した。式目には、連歌のそれを緩和したもの

が用いられたが、『和漢篇』『漢和法式』など、和漢聯句のための式目も制定されている。

狭義には、和句から始まり、漢句の隔句に押韻するものを和漢聯句、漢句から始まり、漢句、和句ともに隔句に押韻するものを漢和聯句と呼ぶ。

* 「永正七年正月二日実隆公条両吟和漢百韻」

京都大学文学部国語学国文学研究室所蔵（Gm-6貴）。卷子装一卷。孤本。

本百韻は、三条西実隆（さねたか）、公条（きんえだ）父子両吟になる和漢聯句である。端作には「永正七年正月二日」と記されているが、『実隆公記』『再昌草』によれば、永正七年（1510）正月二日から四日にかけての三日間で少しずつ詠み継がれた模様である。

発句「雨はれてにほふや木のめ春日影 雪（実隆）」

入韻「東風雪漲溪 公條」（齊韻）

実隆は、後土御門天皇、後柏原天皇二代の宮廷における和歌、連歌、和漢聯句に指導的な役割を果たした。本百韻興行時、五十六歳。公条は、その嗣子として三条西家の古典学を継承・伝授した。興行時、二十四歳。

（長谷川千尋 記）

今後の活動

7月16日午後2時 文学部第一講義室

シンポジウム「古典と近代文学」

須田千里助教授（京都大学大学院 人間・環境学研究科）

「人物像の変容 芥川龍之介「鼻」、太宰治『新釈諸国噺』をめぐって」

戸倉英美教授（東京大学大学院 人文社会系研究科）

「中国の古典と近代小説 芥川、太宰、魯迅」

7月28日 午後3時 「坤の会」

9月29日（月）午後3時 「坤の会」（担当）小山順子、中島貴奈
「永正七年正月二日実隆公条両吟和漢百韻」輪読9回目

輪読会「坤の会」は、10月以降も最終月曜日3時から毎月行う予定です。